

# 長州藩における牛痘種痘法の導入と普及

小川亜弥子

## The Introduction and Dissemination of the Vaccination Methods in the Choshu Feudal Domain

はじめに

- ①牛痘種痘法の導入
- ②引痘掛の任命と種痘の開始
- ③諸士・卒、及びその家族への種痘奨励の布達
- ④諸郡種痘法の制定
- ⑤諸郡種痘法の実施
- ⑥藩領域を越えた種痘の承認
- ⑦諸郡種痘法の改訂

### 【論文要旨】

明治維新史研究の中で、長州藩は、常に分析の対象とされてきた。このため、長州藩の幕末・維新时期の研究は、必然的に、政治史・経済史的側面からの研究を中心としており、現在、膨大な蓄積量となっている。こうした中で、筆者は、当該期の長州藩を、洋学史的側面から焦点化する有効性を主張してきた。

周知のように、幕末期洋学史研究においては、当該期の洋学の性格規定をめぐって、現在二つの見解がある。一つは、洋学の軍事科学化を重視する見解であり、もう一つは、洋学の地方への展開、即ち在村蘭学を重視する見解である。換言すると、この二つは、当該期の洋学の扱い手をめぐる問題に他ならない。まさに、田嶋哲郎氏が分類した「体制内での立身・為政者への接近を指向した為政者指向型」と、「在地の蘭方医として地域的活動を専らとした在村蘭方医型」である。現在、当該期の洋学史研究では、大局的には二つの見解が交わることなく、各々が平行して突き進められている。

筆者は、これまで、長州藩の洋学を、前者、即ち軍事科学的側面から検討してきた。しかし、同時に、後者、即ち在村蘭学の問題を放置して、幕末期洋学の性格規定をすることは不可能であると考えている。かつて、拙著『幕末期長州藩洋学史の研究』（一九九八年）で分析したように、長州藩における有名蘭学塾の出身者は、在村医及び地主豪農層においてその半数以上を占めている。緒方洪庵の適塾では八六%、伊東玄朴の象先堂においては六〇%にも上った。このように、後者の問題は、少なくとも、長州藩における洋学の実態解明にとって、欠くことのできない検討課題であるといえる。以上のようないくつかの問題意識の下、後者との接点を探りながら、長州藩におけるモーニッケ苗の導入・実施及び普及について検討したものが本稿である。特に、普及の過程については、諸士・卒、及びその家族への奨励、諸郡種痘法の制定と実施、藩領域を超えた種痘の承認などの段階を踏まえ、具体的な様相を明らかにしている。